

横浜市感染症発生動向調査報告 10月

《今月のトピックス》

- RSウイルス感染症の報告が非常に増加しています。
- 今シーズン初となるインフルエンザでの学級閉鎖の患者からAH1pdm09が検出され、分析した結果、ワクチン株と類似しており、耐性株ではありませんでした。

全数把握の対象

【10月期に報告された全数把握疾患】

細菌性赤痢	3件	急性脳炎	6件
腸管出血性大腸菌感染症	45件	クロイツフェルト・ヤコブ病	1件
E型肝炎	1件	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	2件
A型肝炎	2件	後天性免疫不全症候群(HIV感染症を含む)	2件
デング熱	2件	ジアルジア症	1件
ライム病	1件	侵襲性インフルエンザ菌感染症	1件
レジオネラ症	13件	侵襲性肺炎球菌感染症	5件
アメーバ赤痢	4件	梅毒	8件
ウイルス性肝炎	1件	播種性クリプトコックス症	1件
カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	6件	バンコマイシン耐性腸球菌感染症	1件

※9月期の感染症発生動向調査委員会の調査対象期間がシルバーウィーク日程のために繰り上がったことにより、10月期にとりあげる全数報告の対象期間が通常より長くなっています。

- 1 **細菌性赤痢**: *Shigella sonnei*(D群)の報告が3件あり、1件は渡航先(インド)での感染、もう2件は国内での感染が推定されています。
- 2 **腸管出血性大腸菌感染症**: 市内保育園で園児、職員等の間で2次感染が疑われる集団発生がありました。保育園など集団生活を行う場所ではより慎重な感染防止対策が求められます。手洗いや消毒の徹底に加え、特におむつ交換の際には手袋の着用や適切な場所の設定などより慎重な感染防止対策が求められます。
- 3 **E型肝炎**: 40歳代の国内感染例の報告が1件あり、原因は不明でした。国内での感染は、多くが生肉や内臓の喫食が関連しており、それらの喫食の際には十分加熱することが大切です。
- 4 **A型肝炎**: 成人例の報告が2件あり、どちらも国内での感染が推定されています。近年国内感染例が増加しており注意が必要です。
- 5 **デング熱**: 2件の報告があり、どちらも海外渡航歴(フィリピン、インド)がありました。
- 6 **ライム病**: 30歳代の報告があり、米国ペンシルバニア州ピッツバーグでの感染が推定されています。横浜市へのライム病の届出は2009年の1件(市外在住者が横浜市内医療機関を受診し届出)以来です。[国立感染症研究所](#)によると、ライム病はマダニによって媒介され、1970年代以降、アメリカ北西部を中心に流行が続いています。欧米では現在でも年間数万人のライム病患者が発生し、さらにその報告数も年々増加していることから社会的にも重大な問題となっています。本邦ではライム病患者報告数は少ないものの、野鼠やマダニの病原体保有率は欧米並みであることから、潜在的にライム病が蔓延している可能性が高いと推測されており、注意が必要です。
- 7 **レジオネラ症**: 肺炎型12件、ポンティアック熱型1件の報告がありましたが、感染経路等は現在調査中です。
- 8 **アメーバ赤痢**: 腸管アメーバ症4件の報告があり、すべて国内感染例でした。2件は経口感染、1件は同性間性的接触による感染、残る1件は感染経路等不明でした。
- 9 **ウイルス性肝炎**: 1件のB型肝炎の報告があり、中国での性的接触による感染が推定されています。
- 10 **カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症**: 6件の報告がありましたが、院内集団感染等の報告はありませんでした。
- 11 **急性脳炎**: 6件の乳幼児の報告がありました。病原体検索中です。
- 12 **クロイツフェルト・ヤコブ病**: 1件の遺伝性プリオン病の報告がありました。
- 13 **劇症型溶血性レンサ球菌感染症**: 2件の報告がありました。1件は40歳代で創傷感染が推定されており、

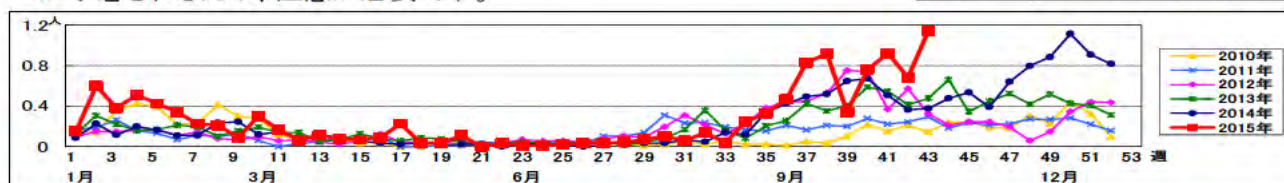
血清型はA型でした。もう1件は70歳代で感染経路等不明でした。

- 14 後天性免疫不全症候群(HIV感染症を含む):無症状病原体保有者1件、AIDS1件の報告がありました。どちらも国内での同性間性的接触による感染が推定されています。
- 15 ジアルジア症:1件の50歳代の報告があり、国内での経口感染が推定されています。横浜市では、ジアルジア症の届出は最近では2013年2件、2014年1件でしたが、今年には既に計4件報告されています。ジアルジア症は、人に身近な犬でも見られる動物人共通感染症であり、日本の犬では、1.9-14.6%で感染が確認されています。 ◆参考:[ジアルジア症について](#)(横浜市衛生研究所)
- 16 侵襲性インフルエンザ菌感染症:1件の報告(90歳代)がありました。
- 17 侵襲性肺炎球菌感染症:幼児2件、学童1件、成人2件の報告がありました。幼児例2件でどちらも予防接種歴が4回有りましたが、他の症例では予防接種歴が確認できませんでした。
- 18 梅毒:8件の報告(早期顕症梅毒Ⅱ期2件、早期顕症梅毒Ⅰ期2件、無症候期4件の報告があり、感染経路では、国内での異性間性的接触6件、性的接触(詳細不明)1件、感染経路感染地域等不明1件でした。
- 19 播種性クリプトコックス症:1件の報告があり、ステロイド内服等による免疫不全の影響が推定されています。
- 20 バンコマイシン耐性腸球菌感染症:80歳代の報告が1件あり、以前の保菌が推定されています。

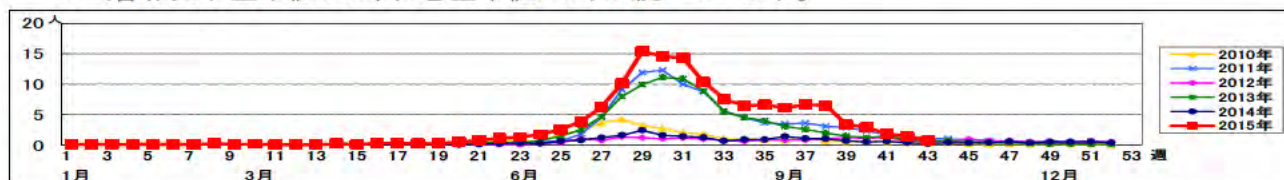
平成27年 週一月日対応表	
第38週	9月14日～9月20日
第39週	9月21日～9月27日
第40週	9月28日～10月4日
第41週	10月5日～10月11日
第42週	10月12日～10月18日
第43週	10月19日～10月25日

定点把握の対象

- 1 RSウイルス感染症:第43週は市全体で定点あたり1.14と、横浜市で感染症発生動向調査を始めて以来もっとも多い報告でした。今後も増加が予想されるため、注意が必要です。



- 2 手足口病:第43週は市全体で定点あたり0.75と落ち着いています。ただ、区別では中区で2.67と警報レベル(警報発令基準値5.00、終息基準値2.00)が続いています。



- 3 感染性胃腸炎:第43週は市全体で定点あたり3.19と僅かに増加傾向です。今シーズンは、これまで検出例の少ない遺伝子型(GⅡ.17)のノロウイルスの流行が危惧されており、厚生労働省が注意喚起しています。まだ今シーズンの市内におけるGⅡ.17の検出はありません。GⅡ.17はノロウイルス迅速診断検査キットでの検出感度が低いことが報告されており、注意が必要です。
- 4 インフルエンザ:第43週は市全体で定点あたり0.25ですが、第43週に今シーズン初めての学級閉鎖が報告されており、AH1pdm09が検出されました。また、市内病原体定点からもAH1pdm09が検出されており、遺伝子解析の結果はどちらも3月にインドで流行した株と類似していました。(ワクチン株との抗原性解析(HI試験)ではすべて同等～1管差(一般的に2管差(HI価4倍)以内でワクチン株と類似していると言われています。)でした。耐性株はありませんでした。
- 5 性感染症:9月は、性器クラミジア感染症は男性が14件、女性が9件でした。性器ヘルペス感染症は男性が5件、女性が2件です。尖圭コンジローマは男性6件、女性が2件でした。淋菌感染症は男性が15件、女性が0件でした。
- 6 基幹定点週報:マイコプラズマ肺炎は第38週2.00、第39週1.00、第40週1.00、第41週2.33、第42週2.00、第43週2.00と、継続して報告されています。無菌性髄膜炎、感染性胃腸炎(ロタウイルスによるもの)、細菌性髄膜炎、クラミジア肺炎の報告はありませんでした。
- 7 基幹定点月報:9月はメチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症2件の報告がありました。ペニシリン耐性肺炎球菌感染症、薬剤耐性緑膿菌感染症の報告はありませんでした。

【 感染症・疫学情報課 】

◇ 病原体定点からの情報

市内の病原体定点は、小児科定点:8か所、インフルエンザ(内科)定点:3か所、眼科定点:1か所、基幹(病院)定点:4か所の計16か所を設定しています。

検体採取は、小児科定点とインフルエンザ定点では定期的に行っており、小児科定点は8か所を2グループに分けて毎週1グループで実施しています。また、インフルエンザ定点では特に冬季のインフルエンザ流行時に実施しています。

眼科と基幹定点では、検体採取は対象疾患の患者から検体を採取できたときにのみ行っています。

<ウイルス検査>

10月に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点34件、基幹定点2件で、眼科定点5件、定点外医療機関からは5件でした。

11月10日現在、表に示した各種ウイルスの分離株7件と遺伝子19件が同定されています。

表 感染症発生動向調査におけるウイルス検査結果(10月)

主な臨床症状 分離・検出ウイルス	上 気 道 炎	下 気 道 炎	イン フル エン ザ	手 足 口 病	ヘル パン ギー ナ	流行 性 耳 下 腺 炎	感 染 性 胃 腸 炎	そ の 他
アデノ 2型	1							
アデノ 3型	1				1			
アデノ 4型	1							
アデノ 型未同定		2						
インフルエンザ AH1pdm09型			1					
RS	1	5						
ムンプス						2 1		
ライノ	1	3	1					
コクサッキー A6型	1			1				1
エコー 3型								1
ノロ							1	
合計	3 3	10	1 1	1	1	2 1	1	2

上段:ウイルス分離数/下段:遺伝子検出数

【 微生物検査研究課 ウイルス担当 】

<細菌検査>

10月の感染性胃腸炎は、基幹定点から1件、その他が9件で、赤痢菌(*S. sonnei*)が2件、腸管出血性大腸菌(O157:H7)が5件、サルモネラ(*S. Corvallis*)が1件検出されました。

その他の感染症は小児科定点から3件、基幹定点から3件、その他が19件でした。

表 感染症発生動向調査における細菌検査結果(10月)

感染性胃腸炎

検査年月 定点の区別 件数	10月			2015年1月～10月		
	小児科	基幹	その他*	小児科	基幹	その他*
菌種名	0	1	9	2	91	97
赤痢菌			2		1	4
腸管出血性大腸菌			5		1	65
腸管毒素原性大腸菌					1	
チフス菌						1
パラチフスA菌					6	5
サルモネラ		1			58	3
カンピロバクター						2
コレラ菌						1
不検出	0	0	2	2	24	16

その他の感染症

検査年月 定点の区別 件数	10月			2015年1月～10月		
	小児科	基幹	その他*	小児科	基幹	その他*
菌種名	3	3	19	42	30	405
A群溶血性レンサ球菌				3		6
T1						
T4	1			5		
T6				1		
T12				2		
T28				2		3
T B3264	1			2		1
型別不能				18		3
B群溶血性レンサ球菌						2
G群溶血性レンサ球菌						5
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌		1			10	40
バンコマイシン耐性腸球菌					1	2
<i>Legionella pneumophila</i>			1			7
インフルエンザ菌			1			12
肺炎球菌	1		6	1	1	78
<i>Neisseria meningitidis</i>						2
黄色ブドウ球菌						1
結核菌			2			155
百日咳		1	1		2	3
その他		1	2		14	42
不検出	0	0	6	8	2	43

*: 定点以外医療機関等(届出疾病の検査依頼)

T(T型別): A群溶血性レンサ球菌の菌体表面のトリプシン耐性T蛋白を用いた型別方法

【 微生物検査研究課 細菌担当 】